

川の字？

杉本賢太郎すぎもと けんたろう

まい日、ぼくはパパといもうとと「川の字」になってねて
います。ぼくといもうとのまん中でパパはねています。ぼくの
しん長は一三センチメートル、パパは一八九センチメー
ル、そしていもうとは一〇〇センチメートルなので、「川の字」
というより「小の字」のほうが近い気がします。

パパはさい近、よるおそくまでしごとをしています。ぼくと
いもうとがねたあとにかえってきます。だから、パパがねると
きには、ぼくといもうとの間になんとかはいりこんでねてい
るそうです。

ぼくもいもうともとてもねぞうがわるいです。朝おきるとパ
パは「今日も二人からいっぱいキックされたから、なんども
目がさめてねむたいよ。」とよく話しています。なんどもおき
てしまうのに、どうしてぼくといもうとの間でねるのか、いつ
もふしぎに思っていました。そこで、パパにそのりゆうを聞い
てみました。するとパパは、「じゅうでんできるんだよ。」とわ

らいながら教えてくれました。しごとでつかれてかえってきて
もぼくといもうとといっしょにねると元気がでてくるそう
です。

ぼくはこの話を聞くまで、本とうはパパよりもママがぼく
となりきてほしいと思っていました。おきている時間はほと
んどいもうとがママをひとりじめしてしまうから、ねるときは
ぼくのばんだつて思っていたからです。

でも、その日から、ぼくといもうとの間はパパの「とくとう
せき」になりました。ねる時にちゃんとパパの分のスペースを
あけています。それなのに、いつのまにかスペースがほとんど
なくなっている、ちよつとせまい「とくとうせき。」

今ばんもぼくはいもうととおふとんの中でパパのかえりを
まっています。

「パパ、いつもおそくまでおしごとがんばってくれて、あり
がとう。」